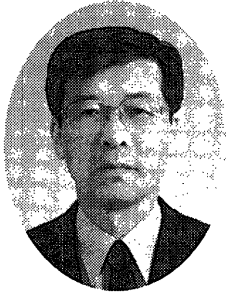




座右の銘

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浜, 忠雄 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9342 |



座右の銘

浜 忠 雄

2003年1月28日は歴史研究室の2年生が受講する「社会科基礎演習B」の最終回でした。そのなかで、私は次のような話をしました。

私が岩見沢校に赴任したのは1975年4月ですが、その年の12月に出た『歴史学研究』427号に掲載された阿部謹也さんの論文「歴史叙述について」の最末尾に、こんな一文があります。

「30年前〔1945年——浜〕の8月10日の朝、長崎で17歳の少年が死の直前に目を大きく開いて小さな声で『なぜなんですか』とたずねたという。その言葉はすべての生者に向けられているのだが、とりわけそれが容易に答えられない歴史への問いかけである以上歴史家が真先に答えようと努力しなければならないであろう。現代の歴史叙述はそれがどの国のどの時代に向けられたものであろうとも、根底にこの問をひめたものでなければならないであろう。」

もうひとつ紹介します。マルク・ブロックというフランスの歴史家が書いた『歴史のための弁明——歴史家の仕事——』（讀井鉄男訳、岩波書店、1956年）の序文冒頭の一文です。

「パパ、歴史は何の役にたつの、さあ、僕に説明してちょうだい。」

マルク・ブロックはヨーロッパ中世史の専門家で、こんにち「20世紀最大の歴史家」と称される人物です。彼は、1940年6月14日ナチス・ドイツ軍がパリに無血入城したのを眼前にして、ソルボンヌ大学経済史教授の職をなげうってレジスタンス運動に身を投じました。しかしドイツ軍に捕えられ、1944年6月16日に銃殺されました。享年54歳でした。1941年に書いた『歴史のための弁明』はさしずめ遺書と言うべき書物です。そういう生き方、というよりも死に方をしたマルク・ブロックについて、かつて日本中世史家の石母田正さんは、こう書きました。「歴史家が死ななければならなかった不幸な時代、歴史家も死ぬことができた幸福な時代」。

さて、このふたつのことを聞いて、みなさんは何を考えますか。〔しかし、誰も語ろうとはしません。長い沈黙が続きました。〕私自身、原爆で死んだ少年、彼はみなさんとほぼ同年齢でしたが、その彼の問いかけにも、マルク・ブロックの死に方についても、言葉が見つかりません。石母田正さんが言おうとしていることについても、その意味は未だに理解できていません。一生をかけての宿題だと思っています。みなさんも、大学での歴史の勉強をとおして考えてみてください。そして、マルク・ブロックの次の言葉も噛み締めてください。「時間の中における人間の学〔つまり歴史学ですね〕は、ただひとつしかなく、それは死せるものの研究と生けるものの研究とを結合することをたえず必要とする」、「自分の周囲の人間や事物や事件を観察する趣味を持たない博学者は、おそらく、有益な好古家の名には値するだろうが、彼は歴史家という名は断念した方が賢明だろう」。

私は、これまで、イギリスの歴史家E・H・カーが『歴史とは何か』（清水幾太郎訳、岩波新書、1962年）のなかで言った有名な言葉を座右の銘としてきました。みなさんの、そして歴史研究室の座右の銘として貰えたら、と思います。

「歴史とは現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話である。」

28年の長きにわたって岩見沢校に在籍していながら、『年報いわみざわ』には一度も投稿する機会を持ちませんでした。この拙文が最初にして最後になりました。北海道教育大学岩見沢校での教育実践の一端としてお読みいただけたら幸いです。

教職員のみなさん、そして、とりわけ学生のみなさんに心から感謝しています。ありがとうございました。